

「吉野材／木曾桧」について

吉野材／木曾桧担当：

(株)丸十商店

田野 巧

吉野材について

吉野材とは、奈良県の中央部を流れる吉野川の上流地域にある、川上村・東吉野村・黒滝村の3村で構成されている地域で産出される桧・杉の事を言います。

吉野林業の始まりは、室町時代末期(1500年頃)、吉野川上村で造林が行われた記録があります。

吉野材の産出が盛んになったのは、豊臣秀吉が当地を領有し、大坂城・伏見城築(1586年頃)の時代に、城郭や社寺の建築材料として、使用される様になったことからです。丸太の搬出は、吉野川を利用した筏流しにより、終点の和歌山に主として供給することになりました。

その後、徳川幕府の直隸となり、住民の主たる生業は丸太の伐り出し・流送により維持されてきました。しかし、木材需要の増加により、森林資源を無計画に伐採した事から、造林の必要性が生じました。そして、幕府の植樹奨励もあり、本格的な人工林への移行が進められました。しかし、丸太の伐り出し・生産販売だけでは、利益を得る事が少なく、一方、村に課せられる年貢は高く、村としては租税の支払いに窮し、郷内の有力者に林地を売却、又は造林能力のある者にこれを貸し付ける制度を設け、元禄年間(1700年)を前後する頃に、村外の商業資本を通じ、借地林が発生していきました。

木材販路の拡張に伴い、享保年間(1720年)頃には、山地での杉樽製造が始まり、木材の利用技術が進歩し始めました。

その後、明治時代に入ってから、磨き丸太の生産も行われました。大正時代に入り、兵庫県灘地方の酒造発展に伴い、吉野材の杉は節がなく、目が細かく、真っすぐな材の為、樽材として不可欠な物になり、樽丸生産の最盛期を迎えました。しかし、木材の売買は、筏流しの終点である和歌山で行われ、経済的な主導権は吉野にはありませんでした。その後、昭和12～15年にかけて、吉野町上市にある中洲地域中心に、筏流しの丸太を貯える3つの池を持つ、県営吉野貯木場が作られました。そして、原木市場だけでなく、木材団地を造成し、製材工場を誘致しました。

製材所では、原木を建築用材等に加工し、付加価値を付け出荷しようとする試みが行われました。製材所も杉・桧の柱や造作材だけを挽く工場、杉等樹齢100年以上の大径木だけを挽く工場、神社仏閣や能舞台等の桧の建築資材を挽く工場などが出来ました。その為製材した製品を、運搬する為に貨車の引き込み線が敷設されました。そのおかげで各製材所から、貨物列車に積み込む事が出来、吉野神宮駅から吉野口駅を經由



吉野材
杉 桧

し、国鉄線路を使い、東京の汐留まで運ぶことが可能になり、吉野の製材品が飛躍的に伸びた要因になりました。

吉野には「山守制度」という特有な制度があります。川上村の面積95%約2万5600ヘクタールが林野・山林であり、そのうちの67%約1万7000ヘクタールが人工林であり、その内の90%は村外の方が所有しています。その山林を代々続いている所有者に対し、村民が責任をもって、下刈り・枝打ち・除伐・間伐を行い、手間暇かけて山を管理してきました。この山守制度があったおかげで、吉野に立派な山林が残った理由です。そして、吉野林業に尽力し、特に吉野式造林方法を全国各地に広めた土倉庄三郎(1840年～1917年)氏を忘れてはなりません。吉野では植林の際、密植します。1ヘクタールあたり8,000本～12,000本位。他の地域に比べ3～4倍多く植えます。そして、10年周期位で間伐を繰り返し、皆伐をしません。100年経っても、200年経っても間伐していくことが、吉野林業の大径木作りの特徴です。川上村には100年、200年以上前の方が植えた木がまだ沢山残っています。

現在、山からの出材に関しては、ヘリコプターを利用する事が多いです。それは、吉野の山には、高低差が多い為です。しかし、ヘリコプター出材はコストが高く、収支で損をする様な丸太は出さず、100年生の材でも山に放置されることもあります。

現在、山に従事している方々は、30～80歳代までで、平均年齢が65歳です。最近では建築様式の多様化により和室が減り、吉野材の良さを見せる日本家屋は本当に少なくなりました。ただ、社寺関係では吉野材を要望されることがあり、5年前には、品川泉岳寺の新客殿新築時に、吉野松の赤身柱・造作材を多く使って頂きました。

これからも、山の山林業者、産地製材所、我々問屋も力を合わせ、山を大事に国産材の松・杉の復権に努力いたします。



泉岳寺 廊下



泉岳寺 書院

木曽松について

木曽松は、秋田杉・青森ヒバと並び日本三大美林の一つです。

木曽松は、建築資材の中で最高峰と位置付けられている天然の松です。伊勢神宮の式年遷宮に使う材料としても有名です。(式年遷宮は約1300年前から行われ、途中中断はありましたが、現在も20年に一

度同じ形の社殿や神宝を新たに作り替え、神様にお移り頂く大事な行事です。)

木曾からの木材搬出は鎌倉時代から始まりました。その後豊臣秀吉の時代以降、各地の城や神社仏閣などの建築用材として使われました。

大規模な伐り出しが始まったのは江戸時代初期です。1660年頃には相当量の木曾松が伐採されました。木曾を直轄領とした徳川幕府は、尾張藩にその木曾松を管理させました。この間森林資源は急速に失われ、枯渇の一途をたどりしました。

これに危機感を強めた尾張藩は巢山・留山制度を設けました。(巢山とは江戸時代、鷹の巣を保護してその繁殖を図る為に狩猟・出入りを禁じた山。又、留山は木曾松の保護の為、伐採を禁じた山の事です。)その後、貴重な木材である松・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコの五木についても、御用材以外の伐採を禁止としました。この停止木が後の木曾五木の由来となりました。

木曾松の最高齢は樹齢700年位の木で、胸高直径120cmにもなります。木曾松のある長野県木曾谷は、日本のほぼ中央にあり、東に中央アルプス駒ヶ岳(2,956m)、西に木曾御岳(3,067m)北に鉢盛山(2,446m)など急峻な山に囲まれ、年間降水量2,000~4,000mmと多く、気温も平均9℃~15℃と冷涼な為、厳しい環境が緻密で美しさと強度を兼ね備えた木曾松を育てました。強風で倒れた時にできる胴折れ、他樹の枝が折れ、風で幹が傷付いたりすると出来るバミ、暖かな時期に急に寒気が入り、白太の部分の凍りつき赤身との間に割れが入る目割れ傷、又、表の表面には何もないのですが、製材してみると中から出てくる害虫などのピンホールがあるのは、木曾松が300年以上自然に耐えてきた証です。

西暦607年に建造された、法隆寺の五重塔には木曾松が使われています。松が使われたのは、抗菌作用による防腐・防虫効果だけでなく、松の持つ強度特性です。松は伐採後、200年かけて強度を増し、伐採時に比べ120%程度強度が増します。その後年数をかけ強度は落ちますが、低下具合は1000年で約20%程度だそうです。

木曾松は急激に成長することがないので、細胞壁が緻密な為、耐久性が高く、耐用年数が長く、反り・割れ・くるいが少ないのが特徴です。また、曲がり材の宝庫で、伝統木構造による日本の社寺建築は、曲がり材を多く使用しますが、他の産地では集めにくい曲がり木も、比較的集めやすい利点があります。

逆に欠点は、脂分が少なく、艶に欠け、やや柔らかすぎる為、縁甲板などには適しませんが、鮎屋のカウンター材、神棚の棚板等には多く使われます。

現在の木曾谷の様子ですが、林内に後継樹が全く育っていない状況で、天然木曾松が育つ林床がササで覆われ、今の状況では木曾松の天然更新は難しいと言われています。この様な状況で、生育しているのは、アスナロの稚樹ばかりです。

現在、木曾では天然木曾松から採取した種を生育させ、その苗木を山に戻し、松を育てています。植林した木曾松も、何十年何百年と年数を経れば、天然木曾松と変わらない様になると思います。

昔から木の文化で栄えてきた我が国ですから、今も残る天然木曾松を大事に、植林木を育て、これからも未来永劫、木曾松が残るように頑張りたいと願っております。



木曾松 No20 源平 3ムジ 木表